

「肉用牛入門講座」を終えて

岡山県畜産協会 経営指導部

高齢化や後継者不足等により県内の肉用牛農家が減少する中で、肉用牛の生産基盤を維持・拡大していくためには、一層の規模拡大を推進するとともに、新たな肉用牛農家の発掘・育成が大きな課題となっています。

そこで、当協会では、県の指導のもと、新たな試みとして、岡山県で就農を希望される定年予定者や他産業従事者、畜産他部門からの参入希望者等を対象に、肉用牛経営を始めるきっかけを作るため、年間4回にわたって肉用牛飼養の基礎的な知識の習得から牧場体験実習・視察までを行う「肉用牛入門講座」を開設しました。

ただ、やはり問題（不安）は、受講者の確保だったのですが、昨年の6月から8月にかけて、パンフレットの配布に加え、新聞・インターネット上のホームページ「おかやま畜産広場」・JAや団体等の広報誌（本誌では7月号）等による参加希望者の募集を行ったところ、12名（女性3名／県外1名含む、男性9名）からの申込があり、その内訳も、新規参入希望者2名、定年前後での参入予定者2名、畜産他部門（酪農・肉用牛肥育・養鶏）からの参入希望者5名、農地の荒廃抑制や生き甲斐対策、新技術の習得が目的の方3名と、期待どおりの様々なメンバーとなりました。

それではここで、今年度実施した肉用牛入門講座の概要を紹介します。

記念すべき第1回（平成19年9月2日）は、総合畜産センターにて開催し、開校式（自己紹介含む）を行った後、三題（「肉用牛生産の現状／畜産課」、「肉用牛繁殖経営に取り組もう！／畜産協会」、「肉用牛の飼養管理入門／総合畜産センター」）の基礎講習と同センター内の視察研修を実施しました。



< 第1回入門講座／講習・視察風景 >

第2～3回は、10月から12月の期間に、県民局・支局から推薦をいただいた12名の受け入れ農家（先進経営）の中から、経営の特徴を見て受講生自ら選んだ2カ所の受け入れ先で（全体では延べ17カ所）、実践研修（人工哺乳、飼料給与、自給飼料の収穫、牛舎清掃、放牧による飼育管理等）をさせていただきました。

最後の第4回（平成20年1月18日）は、全農総合家畜市場にて開催し、子牛セリ市場の視察を行った後、営農支援に係る補助事業や融資制度の説明、空き牧場情報の提供、受け入れ農家を含めた意見交換会等を実施し、閉校式にて終了となりました（なお、本講座以外でも、各種研修会や共進会といった関係

行事を案内し、参加を促しています)。

意見交換会では、実践研修での感想や将来の夢を語り、素朴な疑問や技術的な質問を投げかけるなど、活発な発言の場となりました。また、受け入れ農家からは、質問に対して的確な回答だけでなく、色々なアドバイスもいただきました。一部紹介しますと、「日々の積み重ねが最も重要。」「挑戦したら失敗はつきもの。でも、それを最小限に食い止める努力と仲間の支えがあって、ここまでやってこられた。」「1人でやっていけるものではない。仲間づくりが一番大切。自分たちも仲間が増えて欲しいから頑張ってもらいたい。」「家族と一緒に働けて、こんな楽しい仕事はない。」等々。関係者としても本当にありがたく、勇気もらえる言葉の数々でした。

ちなみに、受講生には、閉校式で修了証を交付しました。思わぬことだったのか、受講生の中に照れ笑いが広がりましたが、前に出て受け取る際には、何か誇らしげでやる気に満ちた表情に感じたのは、自分だけではないはずです。何かの資格と違って、この修了証自体に効力があるというものではないのですが、基礎的な知識と技術を習得したこと、先進農家と知り合えたこと、何より同じことを志す仲間が何人もいることを示す証明書であることは間違いありません。就農後、牛舎か事務所の片隅にでも、この修了書が飾られていたら、こんな幸せなことはないだろう。



< 第4回入門講座／視察・研修風景 >

さて、1年目の肉用牛入門講座は、多くの方々の協力により、実践研修での事故等もなく、無事終了することが出来ました。特に、受け入れ農家の皆さんには、大変お世話になりありがとうございました。新たな試みは、ようやく始まったところであり、もっと多くの方に肉用牛経営の魅力をアピールし、新規参入を促す一助とするためにも、十分でなかった点をしっかり協議して、次年度以降の本講座に生かしていきたいと考えています(名案がありましたら、当協会までお知らせください)。もちろん、受講終了生(新規就農者)に対しても、引き続きサポートしていく予定であり、県(総畜)では、専門技術を習得するための就農支援ゼミの開講や妊娠した放牧経験牛を供給する体制が整備されることとなっています。

これらの取り組み(三本柱)を通じて、新たな肉用牛経営の担い手育成・確保が進み、本県肉用牛の生産基盤が拡大されることを期待するばかりです。

「おかやまで牛飼い生活を始めたい方を応援します。」あなたも「おかやま和牛を飼ってみませんか？」